

南部地域産業復興推進大会開催協議会御中

南部地域産業復興推進大会 in 水源地のむら～紀伊半島大水害からの復興に向けて～

「スローライフ・フォーラム」開催報告書

特定非営利活動法人スローライフ・ジャパン

■目次

- 1 業務概要
 - 2 「スローライフ・フォーラム」の開催
 - 3 開催内容
 - 1) フォーラム前
 - 2) フォーラム
 - 4 これからの課題
 - 5 おわりに
- 資料Ⅰ シンポジウム記録
- 資料Ⅱ 「奈良まほろば館」での講演記録

1 業務概要

1) 業務名称

南部地域産業復興推進大会 in 水源地のむら～紀伊半島大水害からの復興に向けて～「スローライフ・フォーラム」

2) 開催地

奈良県吉野郡川上村

3) 実施期間

平成 25 年 11 月 24 日(日)

4) 業務内容

奈良県南部の振興のために、全国各地の人と地元の人が交流し、今後のむらおこしについて、議論し、考える場をつくる。

2 「スローライフ・フォーラム」の開催

1) 目的

- ① むらおこしを議論し、考える場をつくる。
- ② むらおこしのプロジェクトの発表や、試行の場をつくる。
- ③ 地元の人と外の人が実際に交流し、お互いに刺激し高めあう。
- ④ 全国への呼びかけにより、「なんゆう祭」「スローライフ・フォーラム」「川上村」の存在を知らしめる。

2) 概要

- ① 名称： 「スローライフ・フォーラム in 水源地のむら川上」
- ② 日時： 平成 25 年 11 月 24 日(日)13 時～16 時
- ③ 会場： 川上村「やまぶきホール」
- ④ テーマ： 『「むら」に暮らす』
- ⑤ 構成： 「歓迎のことば」「むらおこしプロジェクト発表」
「基調講演」「パネルディスカッション」
「感謝のことば」
※前日には、「村内視察」「交流夜なべ談義」が。当日午前中は
「ダムサイト会場」「逸村逸品展」の見学も。

3) 参加者

フォーラム参加者約 300 名

うち村外参加者約 50 名（十津川村・野迫川村・奈良市など近郊。遠方からは、東京・静岡県掛川市・佐賀市・大阪府大阪市・広島市・富山県高岡市・福井市・三重県松阪市など）

4) 広報

- ①東京「奈良まほろば館」で参加呼びかけの事前講演会(4 回。延べ 120 名参加)※内容は資料に
- ②6 月 10 日～10 月末 NPO スローライフ・ジャパンホームページで PR。
- ③メールマガジン「週間スローライフ瓦版」(約 3500 人に送信)で、25 回にわたり「なんゆう祭」全体も含めその特色とポイントを紹介。11 月 26 日は事後報告特集号を発行。
- ④12 月 17 日東京・スローライフ学会「さんか・さろん」で報告会。

3 開催内容

1) フォーラム前

フォーラム前日、当日午前中にフォーラムを肉付けする充実した内容が用意された。村を知り、村人と外来者が親しく交わる、ダムのある暮らしを実感する、この時間があつたからこそそのフォーラム内容となつた、といえるだろう。

①村内視察

- ・日時：11月23日(土)14時～16時30分。
- ・参加者：村外からの来訪者中心に30人。役場・村民ガイド2名
- ・交通：マイクロバス・乗用車使用
- ・コース：白屋橋→吉野美林→朝日館→森と水の源流館

・内容：

天気に恵まれ川上村の紅葉が美しく、さわやかな日和となつた。白屋橋から川上村白屋地区を見学。2003年大滝ダムの完成が間近に迫り試験貯水が行われたときに、ここで民家や道路に亀裂が入り、地すべりが起きた。このため37世帯が移転、ダムの完成は10年先となつた。現在ここに新たな景観計画がなされ、杉の多い村内で貴重な花や紅葉の景観が育ちつつある、と説明を受ける。

奈良県南部地域の吉野町や川上村の“吉野杉”は国内外に知られる高級ブランド材、人工三大美林のひとつである杉林を見学。昨今は安い外国産の木に押され国内産の木は売れず、大変厳しい状況にある。切り出した杉はヘリコプターに吊るして運び出すことも。国産の木をもっと使い、日本の林業を守りたいとの感想が多く出る。

世界遺産の大峯山の登山口前の、130年前からの宿「朝日館」。川上村柏木は熊野街道の中継点で宿場町として栄え、行者宿でもあつた。手作りの「柚子羊羹」をいただきながら、2階の座敷で女将さんから昔話を伺った。台所の現役のかまどや古い建物に参加者皆が感動し、写真を撮る人、質問する人が多かつた。川上村の温かな心に触れたという声が上がつた。

川上村は貴重な天然林を後世に残そうと、三之公地区約740haを村で購入し、「水源地の森」として保存している。森の美しさ大切さを実感する森林学習を進めている「森と水の源流館」で、森の中にいるようなジオラマを観ながら、森の役割について学んだ。



「白屋橋」から景観計画を聞く

吉野美林を前に林業の現実を聞く



「朝日館」で昔の話を聞く

「森と水の源流館」を見学



②交流夜なべ談義

- ・日時：11月23日(土)18時30分～20時30分。
- ・参加者：村内・村外から半々の人数で計70人。
- ・会場：「丹生川上神社上社」
- ・会費：4000円

大滝ダムの工事で、山の上に移転したこの神社について、外来者へ向けて宮司さんがまず解説。本殿跡から出た平安時代以前の基礎石、ご神木が抱えていた石なども。はるか昔から村人の拠り所だった水や雨の神、龍神を祭ってある丹生川上神社上社は、信仰の場であると同時に、村人が集まり、村おこしのために使われる場になってほしいとのお話も。

川上村で“寄合”の名でワークショップをもち、みんなで考えたプロジェクトは「村の宴」。地区ごとでバラバラになりがちだった村人が、一つになる機会がほしい。外の人も混じって交流を起こそう。そのなかで村の伝統的な“食”も守っていこう。様々な意味がある、「宴」の場を作る試行となった。「龍神を祭る村、神社なのだから、鯉のぼりでなく“龍のぼり”を」「水のおいしい村だから、茶粥をもっと大事に」「シカ肉を活かした新しいメニューを開発」「水源地スイーツを作ろう」などの案も実験された。

川上村の「村の宴」のルールとして「外の人・村の人が上下なく混じって座る」「堅苦しい通り一遍の挨拶はしない」「村の味を楽しむ」「酔っ払い過ぎない」「みんなで片づける」「会費制」。これもまた、実験の場となった。正面にはみんなで作った“龍のぼり”が。くじ引きで村内外の人が交互に着席。食事は地元女性グループの手作り。後片付けをしやすくするために、食器は簡易なものを。

計画通り、皆が平らかに集い、次々とスピーチをする交流の場が出来上がった。中でも、秋の色合いの柿の葉寿司、なつかしい味の煮物・漬物、村で活動を始めている「ちびっこ増やし隊」の若い主婦たちによる「鹿肉中華饅頭」の試作、茶粥、小豆粥、芋粥と「おかいさん」（お粥さん）が三種で、「おかいさん兄弟」の提供など、外来者からは大好評となった。「素朴な味を求めて、またこういう宴があれば来村したい」と希望が出た。

村民の間からも「村内のものだけでこんなにごちそうが作れ、外の人が喜ぶとは」「今回の試作の料理は、すぐに商品化して名物にしていこう」「ダムサイトで春にはもっと大がかりな宴をやろう」などの声が上がった。



丹生川上神社上社で



手作りの龍のぼりの下で



3種類の“おかいさん”



地元の素朴なお料理



シカ肉饅頭の試作



皆が次々とスピーチ



富山県高岡からは4人も参加



みんなで記念写真

③「ダムサイト会場」「逸村逸品展」見学

- ・日時：11月24日(日)10時～13時
- ・参加者：各人随時
- ・会場：大滝ダム「なんゆう祭」ダムサイト会場、「やまぶきホール」3階

50年がかりで完成した大滝ダム。ダムサイトを交流の場に利用していこう、ダム湖をスポーツに利用しよう。地元では、むらの暮らしに活用して行こうという雰囲気盛り上がっている。「なんゆう祭」ダムサイト会場ではたくさんのテントが出て、奈良県南部の物産販売などが。「そまびと選手権大会」なども。

一方、「やまぶきホール」3階展示ギャラリーでは23日から「逸村逸品展」が開催。フォーラム参加者は、全国から集まったスローライフ逸品を手に取りながら観賞した。（※詳細は「スローライフ逸村逸品展」開催報告に）

シャトルバスを利用、または参加者同士が乗り合わせてなど、ダムサイト会場とやまぶきホールを移動し、「なんゆう祭」のスケールを実感した。



ダムサイトでの催し見学



「逸村逸品展」見学



2) フォーラム

会場には水の流れと鳥の声の音が流れ、ステージは川上村の杉の枝の緑で飾られ、登壇者の喉を潤す水は“水源地のむら”らしく村内の“百合ヶ岳”から汲んできた湧き水、という設えのもとフォーラムが開かれた。司会は、NPO スローライフ・ジャパン理事の長谷川八重さん。

——フォーラム『「むら」に暮らす』企画意図——(パンフレットから)

「日本中から村が消えていくなかで、奈良県には12もの村が残っています。行政区としては小さな単位でも、そこにはこの日本をつくってきた歴史・景観と社会とがあり、自然と寄り添いながら暮らす人々がいて、心ゆたかな繋がりが 있습니다。都市は、この「むら」の暮らしから、学ばねばなりません。一方、「むら」では、都市と交流することで新しい道を考えてみたいものです。

フォーラムは『ゆっくり、ゆったり、ゆたかに』の視点から地域のあり方を考え、ただします。それに打ってつけのパネラーが論じ合う・・「むら」に暮らす・・。奈良の人にも、外からの人にも味わってほしい“奈良の魅力・むらの魅力”をどうぞ。」

① 「歓迎のことば」

川上村村長・栗山忠昭さん

「川上村は平成6年に、水源地のむらとして、木と水と人との共生、大滝ダムとの共生を心定めしました。森を守りながら、美しい水を下流に流したいという、非常に崇高な精神です。その誇りと責任をほんとうに果たしたいと今も思っています。

しかし肝心の源流域の私たちが、非常に生活が厳しい。森を守りたい、美しい水を流したいと思いつつも、しっかりした生活ができないと、元気でないと、健康でないと、やはり背に腹はかえられないとなります。それは川上村だけの問題だけではなく、全国の山間地の抱えている悶々とした悩みです。

田舎にいれば寂しくなりますが、東京にも町にも今日の皆さんのような山村を応援し続けてくれる、そんな味方が大勢いてくれる。皆さんの元気をいただきながら、またこれからのむらづくりを考えたいと思います」

②「むらおこしプロジェクト発表」

奈良県「一町一村一まちづくり事業」で、奈良県南部の十津川村谷瀬、野迫川村北股、川上村などでむらこしの寄合を続けてきた。村の人たちが手の届く範囲で、今日からでも始められる具体的なむらづくりプロジェクトを決め、進める、NPO スローライフ・ジャパンがその手伝いをしてきた。3つの村からスローライフのむらづくりに繋がる計画の発表があった。3村の発表には、奈良県南部が元気になっている実感があった。

●十津川村「吊り橋に続くゆっくり散歩道」プロジェクト

発表者：北谷忠弘さん（十津川村大字谷瀬総代）、横山兼大さん（地域おこし協力隊）

「谷瀬は、五条の方から来た場合の十津川村の玄関口です。日本一の長い吊り橋があり、観光的には有名で、安全で、自然は美しく、人情も厚いところです。共有財産が共有林という形であり、それを中心に連帯性と協同性のある人たちが暮らしています。日本一の吊り橋を自分たちのお金でかけた、伝統がありません。

30年前から吊り橋が有名になり、観光客がくるようになりました。私たちは「吊り橋茶屋」をつくり共同で経営し、順番で店番をしています。特産品の「ゆうべし」も「むら」でみんなが集まってつくっています。マツタケもむらに生えるので、生産組合をつくり出荷しています。

しかし、過疎は進んで老人ばかりとなり、現在 26 世帯 44 人。死んだ人の補給ができないむらになっていて半分諦めている状態でした。そういう中で、何とかもう一回谷瀬を盛り返そうじゃないかというのが現在の取り組みです。

私たちは、これまで観光客は吊り橋までで、むらの中へ入っては困るという姿勢をとってきました。が、そうやっているともうむらは守れない。これからは外部の人の力を借りてでも、むらを守っていきたいと思っています。

何度も寄り合いを持って話をまとめました。まず、谷瀬の状態を知ってもらうということが第一と、むらの中心にある「森山神社」までの散歩コースをつくろうと取り組んでいます。みんなで道の周辺に花を植えたり、看板を立てたりしています。

茶屋にも新しいメニューを、森山神社に絵馬を、展望所をと、そういうことが主な取り組みです。コースを決定するに当たっては、みんなで歩いてみました。

外部の人たちが散歩コースを歩き、谷瀬に触れて、むらの人たちと話をして『いいところだなあ』と思い、『ああ、ここに空き家があるな。ここに私たち、定年になったら越してこようかな』ということになったら、私たちの計画はうまくいったということになります。

むら中に桜の花が咲く春、来年の4月には谷瀬の人たちの夢を乗せてこの散歩道がスタートします」

●野迫川村「森にひびく“むら”讃歌」プロジェクト
発表者：中本 章さん（野迫川村大字北股区長）

「2年前に発生した紀伊半島豪雨災害によりまして、私たち野迫川村北股地区の住民全員が避難生活を送っております。多くの皆様から心温まるご支援をいただき、この場をお借りして深くお礼申し上げます。来春の帰宅に向けてみんな頑張っています。

野迫川村の気候は1年を通して冷涼で、特に冬季は厳寒の地で、雪に深く埋もれた寒村になります。むらびとは夏場にしっかり働き、冬はひっそりと暖をとりながら春を待ちます。家々にはエアコンがほとんどありません。寒冷な土地柄で農作物も制限されています。

北股地区では昭和40年代ごろから山村民宿が営まれ、村外との交流が盛んでした。上垣内地区では毎年地区全員で区内の花いっぱい運動や美化運動に取り組み、「むら」を訪れる人々を沿道の花や四季豊かな自然で迎えてきました。こうした地区の温厚で世話やきな一面が、今回のスローライフ活動への原点となりました。

このたび地域の寄り合いの会の中で新しいむらづくりを「森にひびく“むら”讃歌」を総称としてまとめました。村内外を問わず、明るく笑顔で接し、挨拶する人情豊かなむらづくり、おもてなしの心について、住民がふだん考えていること、アイデアを2年間かけてゆっくりと検討してきました。

“伝統的な文化を見直し”“地域の特産物を生かしたおもてなし”また、“むらをこれまで閉鎖的にしてきた逆境を逆手に”など話し合い、次のように進めていくことにしました。

- ・涼しい気候を利用した夏の「盆踊り」を復活させ、地区をにぎやかにしよう。
- ・地域で、豊かな農林産物による「森の収穫祭」をしよう。
- ・逆境とされてきた厳冬期の気候、積雪を利用した雪だるまや雪像づくりなどの「雪まつり」で町の人々を招き、一緒に雪遊びをしよう。

素朴な素材しかない寒村だが、心豊かなむらづくりを自分たちのできることから取り組み、展開していくことにしました。高齢化や過疎化一辺倒の状況から脱出する糸口になればと思います。

早速、盆踊りを2回実施しました。奈良女子大生や台湾留学生の皆さんの協力、参加もありました。森の収穫祭は、来春から準備を進めます。

この冬は、雪まつりイベントを計画中です。雪だるま、雪像づくり、竹スキー遊びを手始めに、このイベントを進化させ、雪遊びを楽しみながら町の人々と交流していきたく思います。

「野迫川村の人口と同じ数の雪だるまをつくろうや」という意見もあります。「雪を保存して夏の盆踊りで町の人々をもてなそう」などというアイデアもあり、雪の長期保存の研究も始まりました。

しかし、災害復興中につき、住民がまとまるまではもう少し時間がかかります。住民生活が徐々に落ちつき、明るい声が山々に響き渡る集落づくりができることに夢を膨らませています」



司会 長谷川八重さん



川上村・栗山忠昭村長



十津川村発表



野迫川村発表



●川上村「水源地の村の『宴』」プロジェクト

発表者：木村全邦さん（「森と水の源流館」）、中平真菜香さん・坂本実絵さん（川上村ちびっこ増やし隊）、山本直美さん（工房・白い犬）

「川上村は龍神さんのむら、龍神さんは奈良時代から続く丹生川上神社上社の守り神です。吉野川（紀の川）源流の川上村で何ができるのか寄り合いを重ね、いろいろなアイデアを出し合ってきました。まずは動画からスタート！（AKB48の音楽に乗って、みんなが踊り出演するオリジナルの動画を上映）

「川上村では龍のぼりをつくりたい」「茶がゆの文化を守りたい」「自然を生かしたい。森で結婚式なんてどう？」などなど、いろんな意見が出ました。結果、龍神さんの神社で「水源地の村の『宴』」をすることになりました。

『宴』を通してつながりをつくって、いろいろな夢を実現したいと思います。（23日夜、丹生川上神社上社での交流会の様子を映しながら）

実験となった昨日の「水源地の村の『宴』」です。「龍のぼり」をつくってみようと、龍のウロコはみんなの手形で染めました。お祭りで手に絵の具をつけてぺたぺたと。川上村につながるみんなの手形と心が龍のぼりのウロコになってつながりました。

つながると楽しい、『宴』でもっとつながろう！川上村のうまいもので魅力再発見もできます。完成した龍のぼりの下に集まって、乾杯です。

むらの内外からいっぱい、いっぱい集まりました、わいわいと夜遅くまで話は尽きません。龍神さんでつながったこの縁を力に、もっと大きな縁、『宴』につなげていきたいです」



川上村発表



③「基調講演」

フォーラム『「むら」に暮らす』の基調の話は、『パパラギ』というタイトルの本の紹介から始まった。「パパラギ」とは文明人、自然や時間を敵としている。一方、自然や時間を友達とするのが「むらびと」。そこから学ぶことが多い、という講演となった。



- ・テーマ 「森・水・人——悠々」
 - ・神野直彦さん（スローライフ学会学長・東京大学名誉教授）
- ※講演の抜粋要約。

『パパラギ』という本はスローライフのバイブルです。今から 100 年ほど前、サモアの酋長がヨーロッパに行ったとき、そこで見たパパラギ（文明人という意味）がどうしているのかをサモアの部族の人々に対して語った、それをそのまま本にしたものです。

サモアの酋長、はびっくりしています。『パパラギは拝金主義、金のことばかりいっている。金がない、金がないと。もうひとつ驚いたことには、時間に対する奇妙な態度。時間がない、時間がないといっている』というのですね。

この本の中の一部を引用すると『時間は静かで平和を好み、安息を愛し、むしろの上に伸び伸びと横たわるのが好きだ。パパラギ（文明人）は、時間がどういものかも知らず、理解していない。それゆえに、彼らは野蛮な風習によって時間を虐待している』こういうふうには指摘しています。

最後にパパラギ（文明人）を救うにはどうしたらいいかと。『パパラギの小さな丸い時間機械（時計）を打ち壊し、彼らに教えてやらなければならない。日の出から日が没するときまで、一人の人間には使い切れないほどのたくさんの時間があることを』と、結んでいます。

パパラギ（文明人）が時間を敵として、時間を虐待して生きていくことを批判し、時間というのは人間にとって友達なのだという説いているのですね。

これは自然と全く置きかえても構いません。『時間は静かで』というところを『自然は静かで、平和を好み、安息を愛しているのだ』『パパラギは時間というものをどうということか知らない』『パパラギは自然がどういものか知らず、理解もしていない』といているわけです。

つまり自然のリズム、これは命のリズムといっても構いませんし、太陽のリズムといっても構いません。この太陽のリズムに応じて生きていくということを、パパラギは知らないのだと。

この自然のリズム、これを「悠々」といいかと思ひます。「悠々」というのはゆっくりということと同時に、命と同じように次から次へつながっていく悠久に通じるものですね。

パパラギは自然を敵だとみなし、時間を敵だとみなしているわけですが、これに対して自然は友達なのだ、そして、時間は友達なのだというふうにする人々を何というか。『むらびと』といひます。

『むら』というのはいか。それは、文化人が、人間と自然とが共同して生きていく場で、命を育む場であり、命と命が交流する場だといひいいですね。それから人間と自然、自然は森。

森は、太陽のエネルギーを集めて命を集積する場のことを私たは森と、こいうふうには呼んでいます。それと人間の命。水は人間の体内でいうと血液に当たりますので、ぐるぐるぐるぐる回しながら流れとして命を育んでくれる。

ここが重要な点ですが、ヨーロッパのコミュニティーといひのは人間と人間との命の交流しかありません。人間と人間とのつながりしかないのですが、日本の『むら』といひのコミュニティーは全く違ひます。

人間と同時に森と水が同じ『むら』の構成員として参加しているといひのが日本の『むら』の特色です。日本のコミュニティーといひの特色ですね。人間と同じ資格で自然、森と水が参加してくれる。これが『むら』の定義です。

ヨーロッパのむら、コミュニティーに行けば、教会がひとつあってその周りに人々の暮らしがあります。日本の『むら』はそんなことはありません。自然が



『むらびと』と一緒に参加しますので、それぞれの地区ごとに神社も仏閣もたくさんあるのです。祈りの場、これもパパラギが忘れていていることです。

祈りというのは自然への感謝ですから、人間と自然との命の交流の場です。しかも命というのは自己再生力、自分で再生していくものです。自然も同じことですね。

生きている自然は必ず再生をしていきますし、人間の社会もみんな再生していくわけです。

命の源泉ですから、水を注ぐと森が育ち、森が生まれると、そうすると水が湧いてきます。そうすると、その水が湧いたものが雲になって、天から水を降らすと同時に大地からも水を降らせてくれる。そこで人間の生命が出ていくわけですね。

川上の水を飲み、森の中で暮らす。これが最もいいことだということを日本人は忘れ始めたのです。山にどんどん登って行って、山の神をたたえると同時に川の神をたたえながら自然とともに生きていく、これが『むら』という生活だといっているかと思えます。

まだ時間が足りないといっているのがパパラギです。パパラギの思想は何か。時は金なり。タイム・イズ・マネーという考え方になっているわけですね。それに対して『むらびと』はそういうことを考えないのです。

『むらびと』は人間と人間との触れ合い、それから人間と自然との触れ合い、この中に幸福を見出していくということですね。

“お・も・て・な・し”といっていますが、あれは人間と人間が触れ合うことではないのです。東京のパパラギのおもてなしには、表はなく裏があるんですね。それはお金が欲しく、つまり、お金が欲しくてこびを売っているおもてなしであり、だから、表記も誤表記をしょっちゅうしておもてなしをしているというのがパパラギのおもてなしです。

森と水と人間、これが共同で意思決定をしながらやるところが『むら』というところですがけれども、私たち人間には“所有欲求”、つまり外在するもの人間の外にあるもの、これを所有したいという欲求と、“存在欲求”人間と人間が触れ合いたい、人間と自然とが触れ合いたいという欲求と、2種類あります。

何か外在するものを所有したいという“所有欲求”が満たされると、人間は“豊かさ”を実感します。それに対して人間と人間、人間と森と水と触れ合うということをする、つまり“存在欲求”が満たされる、触れ合いによる欲求が満たされると“幸せ”を実感するのですね。

私たち人間はそろそろその事実気がつき始めて、今までは“所有欲求”を満たすために“存在欲求”を犠牲にしてきたのだけれども、“所有欲求”はあるけど欠乏という状況はある程度満たされたので、これからは“存在欲求”、つまり“幸せ”を追求していこうと。

こういう動きは、世界各地で起きています。『むらびと』たちは金で何ができるかということをしなくて、命を使って何ができるかということを考えてるので、パパラギと全く違うということです。

ヨーロッパの自治の原点がコミュニティーであるのと同じように、日本の自治の原点は『むら』です。そして、むらの寄り合いには、ただ単に『むらびと』だけではなく、森と水も参加して、自然とともに生きる。

自然とともに生きますので多層的で、ひとつの『むら』といっても、幾つもの小さな地区、自然とともに生きている幾つもの小さな地区が集まって『むら』になっている。これが日本の特色であり、自治もそこから生まれるのだと思います」



④「パネルディスカッション」

パネルディスカッションは、【奈良の「むら」の印象】【パネリストの専門分野からの意見】【村の未来像】といった流れで論じられた。以下意見要約。

※全体記録は別途



・ テーマ『「むら」に暮らす』

・ 登壇者

コーディネーター

増田寛也さん（スローライフ学会会長、野村総合研究所顧問）

パネリスト

荒井正吾さん（奈良県知事）

尾田栄章さん（NPO 法人渋谷川ルネッサンス代表）

中村桂子さん（JT 生命誌研究館館長）

坪井ゆづるさん（朝日新聞東北復興取材センター長・仙台総局長）

【「むらの印象」】

・ 地域がそれぞれに自然を変えながらも「里山」という言葉に象徴されるように美しく、また個性ある文化を育ててきた。いまの生活を守ってほしい。

・ 大滝ダム完成まで50年、大変な配慮を重ね、土地を大事にしながら造り上げたが、なお、それでよかったか、という考えもある。

・ 健康で長生き、というのは山でも街でも変わらないが、山に欠けているものを補っていく、ということでありたい。ライフスタイルを変えないで自然と交じわっていくように。

【専門分野から】

増田：

人口問題を『中央公論』1月号に書いた。2040年に240~50の市町村が消えていくという予測であり、中山間部にとっては「不都合な真実」が言われている。

20代、30代の女性が減っていくことが深刻であり、ヨーロッパと違って日本では経済の中心地に若い女性、若い層が集まっていくことが問題だ。東京は、住宅事情、教育にお金がかかるなど、出生率が低い。山間地の村が若い女性を東京へ出さないように——。



神野：

それぞれの地域のそれぞれの文化を捨てたときに一極集中が起きる。伝統的な建物を壊して近代ビルを建てる、画一化すると同じ文化だから移動していく。それぞれの地域がそれぞれのライフスタイルを守っていくことだ。

そして、高度成長期との違いは、地方から東京への移動で、豊かな人が動く。貧しい人は移動できない。それぞれの生活様式を守って、それを支えている産業循環、産業を起こしていくことがもっとも重要である。



人口が減らない沖縄県では、人がふるさとを出ない。出ていっても高等教育、大学に行ってまた戻る。故郷を見捨てない。



坪井：

その地域の文化を守るのだが、個性あるアイデアを出さねばならない。たとえば、この杉の木。ヨーロッパでは木の使い方が大きく変わってきている。木造の3階建、4階建が当たり前になってくるのではないか。

また横並びはダメ。駅前も同じ風景ばかりだが、十津川の谷瀬の吊り橋でバンジージャンプをやってみるとか、野迫川では雪を売れないかと考えてみる事が大切。

中村：

生き物は雌がベース。日本の若い女性も、いま「この生活はちがう、変えよう」と思っている人がいっぱい。でも1人の力ではできない制度、雰囲気であり、それを活かせるように、と思う。



一極集中をやめないと生き物として生きられない。食べ物とエネルギーをきちんと考えていくと、地元でできる。森は、ずいぶんいろいろできる。生物学の立場からそう思う。



尾田：

東京から福島県広野に移ってみると、職住接近で自然の中に抱かれて・・・、快適だ。でも東京で生活すると、そちらにも適応する。第二次大戦後の日本は、集合住宅を建てたが、あれは欧米の都市づくりの一面しか捉えていない。

ヨーロッパでは田舎の住宅とワンセットでウィークデーは都市で生活、金曜日の夜から日曜日の午前まで職場にいない。二つの生活パターンの組み合わせ

せだ。

水について語ると、いまの世界ではネクサスの議論が盛ん。水とエネルギーと食べ物。三つの連携、相互連関を頭に置いてみる。その枠組みで考えたとき、東京に一極集中しているパターンでは国の存立は図れない。

吉野、丹生といったところは、これから感性を研ぎ澄ますような自然環境を作っていく必要があり、変なものを加えるのでなくて、いまある変なものを抜いていく作業こそが大事だ。

荒井：

東京一極集中を避けて地方がどう元気になるか、それは奈良の南部振興と同じフェーズにある。

近代化が国の目標として画一性を考えてきたのは間違いだろう。江戸時代は、地域に多様な文化があった。その歴史の方が長かった。この「違いがある」のは、いじめられる。違いをいじめない文化にならねばならない。



ほんとうは個性があっても、みんなと同調するように装わないと日本では生きていけない。そこを改めなければならない。地域の個性をどう大事にするか。奈良の個性については大事にしようと腐心している。

奈良の文化の値打ちはユニークな歴史。京都とまったく違う。京都は奈良の発展形であって、奈良が日本の源流という強烈な個性意識がないといけない。



【未来像を描けば・・・】

・「川上宣言」はずばらしい。上流が、みずから「自分たちは水をきれいに使って、下流の人たちのために尽くす」。水源地域を意識して下流でも有効に、ということだが、加えて、下流でも、必要最小限に水の使い方を抑えると

いう考えを伝えていくべきだろう。

・水を大事に使えば自然界へ戻せる。だから使う水を最小限度にすべきだ。この上流側の呼びかけは大きなインパクトであり、下流との連携も深まり、人が動き出すだろう。そういう人をひきつけるに足るものを川上村はもっている。

・生きものは38億年も続いたが、多様だから生きられた。この多様性は東京で暮らすより、ここの方がこれからの可能性は大きい。宮沢賢治の「ほんとう

の幸せ、ほんとうの賢さ」に加えて「ほんとうの豊かさ」を考えるべきで、そういう豊かさこそ、ここの南部地域がぜひ追求してほしい。

・福島県飯舘村の、菅野村長が「多くを持っていない人が貧しいのではなくて、多くを欲しがる人が貧しい」といっている。奈良南部での暮らしは、都会暮らしに慣れた人からみれば不便なこともたくさんあろうが、都会では得られないものがある。ぜひ自信をもって自分たちのよさを再発見しつつ、それが生活の糧となるように——、と思う。

・差異と格差を分けて考えるべき。差異は、それぞれ地域ごとの多様性が必要だ。災害とか戦争が起きたとき、一極集中していたら、完全にやられる。多心—ポリセントリックが重要であって、だからこの地域に住みたいが医療がない、教育ができない、ということではいけない。

・活性化には、みんなが先生で、みんなが生徒というつもりで取り組まなくてはいけない。だれかがリーダーでやってくれる、というのはダメで、みんなが先生として自信をもち、みんなが生徒で謙虚な気持ちでやるのが大事だ。

・地域には、人と物しかなく、お金がない。人材と資源を最大限に活用してほしい。

・行政・政治の悩みは、弱い人を助けるのか、がんばる人を助けるのか、ということ。弱いについて、がんばっても弱いままの人、がんばらないから弱い人とかがあるが、基本的には「がんばる人」を応援したい。南部にはがんばる人がいるから応援がつく。

・暮らしで大事なのが、健康と長寿。それを一つの指標にしたい。

・経済の方はかなりハンディがある。やっと追いつきつつあるが、地域の誇り、文化の誇りは相当に強烈なものをもつ。奈良の文化・歴史はアピールされていて、すごい、といわれる。この面はしっかりとがんばりたい。



⑤「感謝のことば」

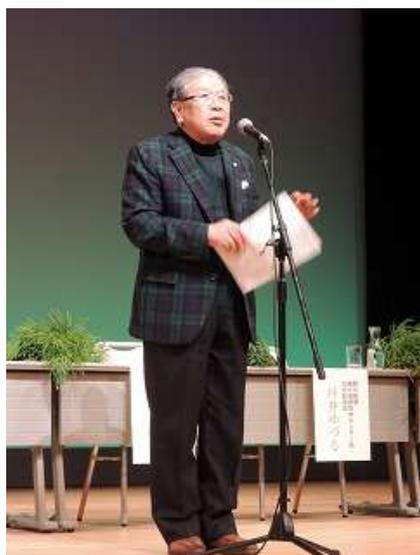
・川島正英（NPO スローライフ・ジャパン）

「私たちは、この村というのを仮名文字で「むら」と書いて、それにこだわってやってきました。これは行政区画の漢字の村と違って、もっと根源的な、暮らしていく、生きていく、そういう文化の最小限の単位として、集落としてのむらというのを意識しながら。

ところが、今それはまさに日本全国から壊れつつある。それでこういうフォーラムを開かせていただきました。奈良県にご協力いただきまして、「なんゆう祭」の最後の締めくくりという非常に重要な場でこういう機会を与えていただきました。その責めは十分に、これは皆さんの聞き取りいただいたように果たせたと思います。

もちろん、ひとつのむらのこういう食べ物をつくろうとか、こういうことを都市と交流しようとか、そういう具体的な話はありませんでしたが、トイレの話は別といたしまして、ヨーロッパあるいは世界各国の例なども引き合いに出しながら、しかも日本全体の政治経済をにらみながらの話で、皆さんにもご参考にしていただけたかと思えます。

「画竜点睛」という四字熟語があります。川上村は龍を1つのシンボルにいたしておりますが、特に最近「画竜点睛を欠く」という否定的な言葉で使われることが多いのですが、きょうはその「画竜点睛」そのものであったのではないかと自負いたしております、それにパネラーの皆さん、あるいは応援していただいた皆さんのご協力ですばらしい会になったのではと感謝します」



4 これからの課題

1) 奈良県南部を「日本人の心のオアシス」に

神野直彦さんは、『十津川、野迫川、川上の三つの村がいつまでも「むら」でいて欲しい。なぜなら三つの村は、日本人の心のオアシスだからだ』と語っている。奈良県南部と拡げて理解していただろう。とかく“産業振興”や“復興”“むらおこし”について、その地の立ち位置を掴めず、あやふやなまま“お金稼ぎ”に動き出すことが多く、その場しのぎの“興”が目につく。今回のフォーラムでは、奈良の持つ日本古来のポジション、なおかつ都市化の進む北部とは違う奈良の南部の村々は、奈良県、関西という範囲にとどまらず、日本の心を清め、幸せを感じる場である、ということであらためて確認させてくれた。

2) 「パパラギ」にならない。「むらびと」であり続ける

パネル論議の中で、ライフスタイルを変えないでほしい、いまの生活を守ってほしい、という期待が出ていた。また地域の誇り、文化の誇りは相当に強烈なものをもつ、という考えが強調された。

具体的には、基調講演で「パパラギ」と呼ばれる“文明人”“都市住民”は、今、心のオアシスを求めて「むら」を見つめている。「パパラギ」が奈良県南部にやってきましたら、「パパラギ」だらけだった、ということにならぬように—と。

また、水と森ともに生きてきた奈良南部の川上宣言—川上村がその「むらびと」の誇りを捨てず、さらに磨いて川下の人たちに水の使い方を教える、という考えを伝えていく、さらに自然とともに生きる姿を示すべきだ—と。

「パパラギ」化は、気を抜くとすぐに起きる。お金だけを追いかけていないか？忙しい時間がない暮らしをしていないか？裏のある嘘の“おもてなし”をしていないか？

3) 新しい主人公が新しい発想で“稼ぐ”

生活が厳しい、だが、森をまもりたい、美しい水を流したい、と思いながらも、しっかりした生活ができない、フォーラム冒頭の川上村村長のことばであった

が、ディスカッションの中でも、直接的に“稼ぐ”ことを考えなければ・・・という意見も出た。

「パパラギ」化しないように、しかし、しっかりと“稼いで”いくというのは、スローライフ時代の地域の生き方だろう。それには個性あるアイデアを出さねばならない。しかし林業で生きてきた地域は、ほかの発想がなかなか持ちにくい。また農地が少なく地産地消的なむらおこしはやりにくい現状がある。

資本がないのだから、人材と資源を最大限に活用しよう。これまでの「人」「物」ではない視野を拓ける必要がある。村外から結婚を機に住人となった若い女性は、外部を知っている情報の宝庫。長く地元で頑張ってきた高齢者は知恵と技の宝庫。これまでの働く中心者と違う主人公に注目しよう。

資源も木に限らない、形のない風や歌、風習、料理法、歴史、土地の人柄なども。また、厳しい寒さ、雪、空き家とか、古い、賑わいが無い、店がないなどマイナスに考えられていたものやことも資源として考えてみたい。

こうした新しさを受け止め、発想を実現できる環境整備が必要だ。今の生活を守りながらも、良い変化は実現していこう。

斬新な発想で“勝負”しなくてはならないとして、今回開催した「逸村逸品展」に集まった全国の逸品を超える発想や品物がつくれるのか。奈良県南部はまだまだ後発の印象がまぬがれないが、その意味でフォーラムとあいまって開いた「逸村逸品展」は、大きな役割を果たしたといえるだろう。

4) 外との交流を続ける、活用する

印象深かったのは川上村の「村の宴」、交流・夜なべ談義だった。フォーラムでも、そういった感想が述べられたが、企画した村民にとって忘れられない時間となったはずだ。さまざまな工夫をこらしつつ実験の意味も持って開催された「村の宴」は、村の普段の味がご馳走であり、宴会場でなくとも宴は開けて、みんなが主賓になれる場をつくれるということを確認めあった。

この交流・絆は、フォーラムの一つの柱でもあった。お互いが同じ立場で刺激しあう、お互いを尊重し助け合う繋がりづくり。それは、これからの観光を含めた交流おこしの基本ともいえる。

吊り橋を核に「むらおこし」を考える十津川村谷瀬、この外との絆づくりに動き始めた。いままでは「外の人に入ってほしくなかった」が、いまや「外の人とともに変わっていきたい」と。高校生による道普請なども始まっている。

日本橋「奈良まほろば館」で呼びかけ講演を開いたとき、野迫川村の高野マキが会場を飾った。仏花としてだけ使われたマキは、都市部の女性にはハーブであり、おしゃれな花材にも映った。野迫川マキは今後、都市部の女性との交流ツールになっていく可能性を秘める。交流によって知るヒント、知識ははかり知れない。

フォーラムに集まった外からの客を交えて、今後新しい交流の仕掛けをつくっていくことが必要だと感じさせたフォーラムでもあった。

5) 差異のあるプロジェクトを進めていく

NPO スローライフ・ジャパンは、奈良県南部、とくに十津川村、野迫川村、川上村で、ワークショップや寄合のお手伝いをしてきた。その中で生まれた「むらおこしプロジェクト」は、村人が今日からでも何か前に進むことができる計画である。

パネル論議では、格差ではなく差異を、多様性を、と語られたが、「むらおこしプロジェクト」は、自ら考えた夢に向けてのプランであり、それが主幹になり、これから多岐にわたってむらおこしが展開していく種がたくさん盛り込まれている。だが、「大きく、早く、一度に」という動きには無理がある。

実験やお稽古から始め、小さな成功を積み重ねて、実力をつけ、自信を持ち、楽しくわくわくしながら進めていこう。そこでは必ず、人が育ち、仕事が育つ。ここでも差異をもって。みんなが同じことをしなくともいい、できることを少しずつ、無理をしないでゆっくりと。理屈ではなく、確実に現実を積み重ねていきたい。

5 おわりに

テーマは——「むら」に暮らす。日本の政治・経済が大きく、強く、一つに、と動く流れがあり、「村」は消えていく。だが、その村をこそ大切に——と考え、がんばっている奈良県で、あらためて「むら」を見つめたい、というねらいのフォーラムであった。

奈良県が「一町一村一まちづくり」の政策を掲げ、南部振興のイベント「なんゆう祭」を開く機会に、その締めくくりの催しとしてフォーラムが実現したのだったが、その目的を果たしたといえるのではないか。

特筆しておきたいのは、フォーラムに至るまで3年をかけ、奈良県南部の十津川・野迫川・川上の3つの村を中心に、ホップ：現地ヒアリング→ステップ：ワークショップ→ジャンプ：寄合、と積み上げたことである。

さらに①「むらづくり」と「ものづくり」を結びつけた全国的な活動を紹介する「逸村逸品展」を同時開催した②東京で、奈良の「むら」を考えるフォーラムへの参加を呼びかけて「さんか・さろん」という小講演・懇親の催しを開いた③川上村のワークショップの成果である「宴」の実験的な試みとフォーラム参加者の交流会を重ねる形で開いた——、をあげておきたい。

論議のコーディネーター・パネリスト6人は、奈良県出身と外からとが3人ずつ。専門分野としては、共通して地方政治、国土に幅広く精通し、さらに財政、水、人口問題、生命誌、東北復興などの第一人者、一方、奈良の「むら」の受け手は荒井知事お一人という顔ぶれとなった。

論議の中から浮かびあがった奈良県南部のむらづくりの構図は●いまのままのライフスタイルを変えることなく、個性ある自然・文化・暮らしを守ってほしい●もちろん地域の格差はあらためつつ、がんばる「むら」を後押ししていく●水がすべての源であり、水とエネルギー、そして食べものを連携させる道を探れないか、などであった。国にとっても●女性をベースに「むら」をまもることが東京への一極集中を防ぐ、との考えは意味をもつだろう。

これらの考えの線上からも、3年間の活動で浮かんでいた村ごとの課題に期待がかかる。十津川村は、「吊り橋」から「散歩道」、さらには「村をあげて」と、点から線へ、面への可能性を追求してほしい。野迫川村は、盆踊り・収穫祭・

雪まつりなどで、都市住民のとの交流を図ってほしい。川上村は、村中に“龍のぼり”がなびく大いなる「宴」をたくさん開いてほしい。

奈良県南部の振興は、日本の山間地の見本事例となるだろう。「村」を残し、それが自立し生き延びていく、「むら」の暮らしが都市住民をも救っていく。その大きな役割を担いながら、課題を乗り越え、むらづくりを進めていこう。奈良県南部を応援し続けたい。

■資料Ⅰ シンポジウム記録

■資料Ⅱ 「奈良まほろば館」での講演記録

スローライフ学会が毎月開催してきた小講演・懇親会「さんか・さろん」を、2013年7月・8月・9月・10月と、奈良のスローライフ・フォーラムに向けての呼びかけ講演会「奈良の魅力“むら”の魅力」として東京・日本橋「奈良まほろば館」で開催した。以下、スローライフ学会会員用に配布した記録。

.....

7月：第1回「“むら”の詩情と慕情」～奈良県十津川村、野迫川村を歩く～

【ゲスト】 阪口弘子さん（十津川鼓動の会）、角谷喜一郎さん（野迫川村村長）
7月からは、4回連続で奈良の“むら”の魅力をご紹介します。第1回は、奈良県南部にある日本一大きなむら・十津川村と、そのお隣の野迫川（のせがわ）村の自然と暮らしの素晴らしさを、十津川村の語り部の会坂口さんと野迫川村村長の角谷さんに語っていただきました。（以下、講演要約）

その1 十津川村を歩く

■雄大な山脈美が魅力

十津川村は、奈良県の最南端にあり、県の5分の1を占める日本一大きな村です。人口は約3800人。村の中央に十津川本流が深い溪谷をなし、四方を大峰山脈、伯母子（おばこ）山脈、果無（はてなし）山脈が取り囲む雄大な山岳美が魅力です。そして村を縦断するように2つの世界遺産の道が通っております。

■日本の原風景に出会い元気になれる里

春には、市原集落の七郎桜を見に村内・村外から多くの人々が訪れます。ここに住む七郎さんが植えたしだれ桜が大きく育ち、美しい桜のスポットとなりました。温かい人の心が温かい里となった十津川の話の場所です。夏には、子どもたちが支流の川原で澄んだ水を覗きながら「チチカブ取り」や「メダカすくい」を楽しみます。この川の谷水は冷たいですよ！ 十津川弁で「ひやこい」と言いますが、曇りの日には体が慣れるまでは修行かと思うくらいの冷たさです。秋には、片道1時間ほどかけて祭りの道具を持ってむらの人が集まり、山に祭られている地蔵さんや地域の山の神の祭りごとが厳かに続けられております。神納川地区は、昨年、映画監督の河瀬直美プロデュースの「祈り」の舞台にもなりました。

「天空の里・果無集落」は人気の観光ポスターですが、ここに88年住む東おばあちゃんの笑顔は全国から人を引き付けています。果無は日本の原風景ともいえる懐かしい暮らしに出会える場所。心がなごみ元気になれる里に、たくさんのハイカーが千年の祈りの道を歩きに来られます。

■自主自立の精神を象徴する吊り橋

村には約60基のつり橋がかかっています。集落道がない時にはこのつり橋が重要な生活道でした。谷瀬の吊り橋には年間10万~15万人が訪れますが、長さ297m高さ54mのこの橋は、昭和29年に1戸あたり20~30万を出し合ってつくりました。当時の総工費800万。初任給が7800円の時代にどれだけ大変なことだったか。このお橋を通じて、十津川村の「自分達のことは自分達です」という精神が伝えられています。

澄んだ日には、遠く熊野灘まで見えます。きれいな夕日を楽しむこともできます。このような自然、ありのままの素朴な暮らしが十津川の魅力です。

その2 野迫川村を歩く

■7番目に小さなむら

真言宗総本山のある高野町と十津川村の間にある村が野迫川村です。何にもない村です。役場のある所が標高810m。紀伊半島の南にありながら、ストーブがいらぬのは7・8月だけという所です。255世帯495名で離島も含めて7番目に小さいむらですが、それでも合併せず、自主自立の道を歩いています。

■天空の村だからこそ、の幻想的な風景

村のいたる所に蛍がいます。満月の夜に見るのも幻想的で、川面に蛍の明かりが反射して僕らでも「わあ、ええなー」と思うくらい素敵です。昔から天空の村と呼ばれていますが、雲海も村道、県道からすぐ見えます。満月の夜の雲海を一度だけ見たことがあります。それ以後、あんなに綺麗な雲海をみたことはありません。夏には3,000発の花火を打ち上げますが、山の中での花火は聞いたことがないと思います。周りを山に囲まれているので、空が丸いんですね。その空全体に広がるように調整した花火をは花火師さんの腕の見せ所です。

■自主自立の村の挑戦

学校の生徒数は、小学生17人、中学生3人です。中学校の場合、生徒数3人だと教師が5人しか配置されません。中学校は教科担任制なので最低でも12人必要です。そもそも3人では活気がでない。東京の子どもも村の子どもも同じように教育を受ける権利がある。3年前から教育委員会や文科省にかけあい、今年から小中連携一貫教育を始めました。小学校に中学生を呼び、小学校と中学校の免許を持った先生にきてもらった。教頭先生も数学を教えています。英語は村単独で雇っていますがそれでもまだ十分ではない。今は生徒数が少なくなったら学校数を減らすというのが考え方ですが、これを変えなければ過疎の村の中学校は大変です。大きな十津川村でも4つあった中学校が1つになりま

した。吉野郡はすべてそういう状況になっています。野迫川村は過疎の先端を走っています。何かの機会があったら、今日の話思い出して応援してください。(2013年7月16日開催)

8月：第2回「地球の水・日本の水・奈良の水」

【ゲスト】尾田栄(ひで)章(あき)さん(NPO法人渋谷川ルネッサンス代表)
奈良の“むら”の魅力を紹介する連続さろんの2回目は、水に関わる様々な取組をされている尾田栄章さんに、人間と水の関係をグローバルかつローカルに、また時代も越えて、縦横無尽に語っていただきました。(以下、講演要約)

■地球の水—人は水のある土地でしか生きられない

人類(ホモサピエンス)の先祖は、約7万年前に東アフリカから出発して地球上にちらばった。このグレート・ジャーニーに旅立った理由は何か。言うまでもなく、東アフリカだけでは生活の場として狭すぎたからですが、水のある土地を求めて旅立った、というのが私の解釈です。土地は地球上にいくらでもあります。しかし、使える土地はごく限られている。それは水があるということです。

地球上にはいくらでも水があるように見えますが、97.5%は海水です。さらに北極と南極に氷の形で閉じ込められている水が1.75%ありますので、99%以上がほぼ使えない。使いやすい水は、天から降ってくる水しかないわけで、1年間に降る水の量38万k立方メートルのうち、陸地の上に降る雨の量は11万k立方メートル。このうち、樹木から蒸散するものも含めて流域から直接空中に蒸発散していく水が7万k立方メートル。我々は4万k立方メートルしか使えない。この量を地球上の人口で割ると、一人が1日に使える水の量は15k立方メートルになります。食べ物を作るだけでなく、あらゆる面で水を使いますが、すべて合計して15k立方メートルしかない。水というのは限られた資源だということがご理解いただけると思います。

水と空気と土地は人間の活動を支える主要な要素ですが、水とエネルギーと食物。食物は土地と考えてもらってもいいですが、いま世界では、この相互関係を総合的に解決しない限り本当の意味での解決にならず、地球の未来はないというテーマが、ヴィヴィッドに議論されています。水問題は、ますます注目を集めるだろうと感じています。

■日本の水—古代から続く利水と洪水対策の「治水」

日本の川は滝だと言われます。お雇い技術者として日本に来たオランダ人のデレイケが、日本アルプスから流れ出る川をみて言ったということですが、デレイケが万葉集の世界を知っていたとすれば非常に的確に使っています。万葉時

代には滝は激流を意味しました。氷河を流れ出るスイスアルプスの川のように急流なのが、日本の川の特徴です。

国土の特徴は、国土面積の 10%が河川の下流に展開した沖積平野で、そこに人口の半分が生息し、資産の 4分の3が集中しています。洪水は大変困ったことではありませんが、それによって日本の沖積平野が形成される。したがって、災害をいかに緩和するかということも我々にとって大事なテーマになってきます。日本の川は少し雨がふらなければ渇水になり、たくさん降りすぎると洪水になる。今まさにこのことが日本列島を襲っているわけで、早明浦ダムは渇水で困っている一方、福島では大雨が降って電車が止まる。渇水と洪水が踵を接するようにしておこる。これが日本の水問題、都市問題の特徴です。

日本で最初に組織的に水をつくった人は行基だと思います。行基が行った事業は「行基年譜」にまとめられており、その中に「天平十三年記」という歴史家にも第一級の資料とみなされている資料があります。それに基づいて分析すると、行基は畿内においてすぐれた水資源開発事業を展開している。養老律令を見ても、合理的な形で水管理をしており、日本では古くから利水と洪水対策の両方をあわせた治水に努めていました。

■奈良の水—和製パナマ運河があった！？

大和平野は水のない盆地のため、吉野川の水をもってくることは悲願でしたが、江戸時代に御三家の一つの紀の国の水をもってくることは不可能でした。大正に入ってから動き始めましたが、何度も頓挫し、昭和 24 年になってようやく基本計画が合意され、その場が京都祇園演舞場のプルニエ会館だったことから「プルニエ協定」というしゃれた名前になりました。奈良の水を考える上でこの協定は非常に重要で、その後、十津川・紀の川総合開発計画という形で動き出します。奈良県と和歌山県にダムをつくり、これとは別の十津川（現熊野川）水系の水を吉野川にもってくる。玉突きで吉野川の水を大和川に持ってき、下流の紀の川にも恩恵をもたらす大計画で、この事業によって初めて大和川の水が相当程度安定化しました。

時代を遡って万葉集の中に、藤原京の木材を平城京で再利用するために川を使って運搬したという、古代の輸送がそのまま謳われています。しかし、和泉川から上り山を越えないと佐保川におちない。どのようにして越えたのか。ここには二つの池があることからパナマ運河を連想しました。いくつかのダムをつくることで水を生み出し、その水で河の閘門を維持する。和泉川の支川と佐保川との間に古代の和製パナマ運河があったというのが、私の仮説です。

■節水は何のために必要か

地球の水はすべてが繋がっているわけではない。しかし、人間がその水を使うと、その水は地球を舞台とする水循環に加わります。人間だけが自然界から切

りはなした形で、自分の目的のためだけに使っています。となれば、そういう使い方の量は少なければ少ないほど良いはずです。われわれが地球上にはびこったおかげで、他の動物は大迷惑をしている。だからこそ、我々の水使用は最小限度であるべきだ、ということです。 (2013年8月20日開催)

9月：第3回「世界遺産－紀伊山地の霊場と参詣道の神秘と深美と」

【ゲスト】五條(ごじょう)良知(りょうち)さん(総本山金(きん)峯(ふ)山寺(せんじ) 執行長)奈良の“むら”の魅力を紹介する連続サロン3回目は、山伏の五條良知さんに世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」のひとつ、大峯奥駈道(おおみねおくがけみち)の修験道の修行についてお話いただきました。日本独自の山岳宗教である修験道の中でも、最も厳しい行といわれる大峯奥駈修行。先達たちから口伝だけで伝えられる修験道の精神は、現代人へのメッセージでもあります。(以下、講演要約)

■人々の祈りの営みが作り上げた吉野の桜

紀伊山地の3霊場(吉野・大峯、熊野三山、高野山)とそれに続く3つの参詣道(大峯奥駈道、熊野古道、高野山町石道)は、平成16年に世界遺産に登録されました。1300年続く奥駈(おくがけ)と呼ばれる修行は大峯山中の吉野から熊野まで、250kmにわたり険しい道を約7日間で歩き通す修行です。奈良時代に役行者(えんのぎょうじゃ)がこの道を拓いたと伝えられており、吉野・大峯の金峯山寺は修験道の総道場です。役行者が末法の世の人々を救いたいとお祈りをされ、岩を割って出てこられたのが蔵王権現様です。この権現様をご本尊にお迎えし、そのお姿を桜の木で彫刻して蔵王堂をつくり、山上の蔵王堂では大勢の人が来られないのでふもとの吉野山におまつりをしたのが山下の蔵王堂で、この山上山下(さんじょうさんげ)の蔵王堂が金峯山寺の始めとなりました。桜の木で蔵王権現を彫刻しましたから、地域の方がご神木として山桜を供え続けたために吉野が桜の名所になりました。桜の名所は数々ありますが、いずれも人間が楽しむために植えられたものです。吉野の桜は一本一本、社会が平和でありますように、おじいちゃん・おばあちゃんが元気でありますように、先祖がええとこいけますようにと植えられた、祈りの桜です。それが1300年間続いてきた。桜の寿命は10年から50年。もっても200年です。植えては育ち、枯れてきたのでしょう。人々の祈りの営みによって吉野の桜がつけられたこととなります。

■「人の営み」重視にシフトした世界遺産

世界遺産は981あるそうですがほとんどが遺物だとよく言われます。初めは建造物を中心に考え、古い建造物であれば良いという感じだったそうですが、日

光の社寺の登録のあたりから文化財としての建造物に、そして吉野・大峯では文化的景観ということが言われ始めた。それは何かというと「人の営み」だそう。景色も含めますが、景色が中心ではなく、人々の営みこそが文化を育んできた、それを大事にしよう、ということになってきた。道が世界遺産になるのは世界で2つ目で、ひとつ目はサンティアゴデ・コンポステラです。今も多くの方が巡礼に行かれています。奥駈道も私達山伏が未だに歩いています。文化的景観を含めて全部が自然のもので、それを残してきたのは全て人の営みです。文化的に宗教を育み、日本人がもっているものをそのままに残してきた場所は、紀伊山地の3霊場と参詣道だと評価されたということです。

■すべてを受け入れることで、生かされていることに気づく

修験道は山の宗教です。大自然は道場であると同時に神仏まします曼荼羅世界であり、樹一本一本が仏と感じ、その中を歩かせていただく。蔵王権現がご本尊ですが、ご本尊の心は何かというと大自然なんです。大自然に抱かれ、ご本尊に抱かれて神仏まします中を修行させていただくのが修験道です。「懺悔懺悔（さんげさんげ）六根清浄」といいながら歩きますが、「懺悔こそ良く積罪を滅す」。懺悔とは、仏の前で全部さらけ出し反省し次に行こうということ。それによって自分の罪がなくなる。かつ、六根（五感と「意」からなる人間を形づくる六つの根幹）を清浄することで、六根を通して自分の中にはいつてくるものがきれいになる。大峯という大自然の中で積極的に懺悔し、六根がきれいなものになりましょうというのが、大峯の修行の一番大事なところ。擬死再生といって死んで山に入り再び生まれ変わるといいますが、生まれ変わるのではなく、生かされておることに気付かせていただいて出てくる。修行をしていると、三毒（三つの煩惱）にまみれている自分に気づきます。自分はこの程度のものか、そう思ったときに、すべてを受け入れることができました。受け入れた時にわかったのが、生かされているということです。

■修験道に生きる、昔からの日本人の営み

世界遺産は「モノ」から「ヒト」へ。言い換えますと、文化財から文化へということです。文化はモノではなく人に宿る。このことを通して思うのは、修験道には、昔から日本人が持っていた精神文化やおおらかさ、多様性が残っている。山での水の使い方など、修験道には昔の人がしていたことがいっぱい残っている。それを守ることがあっても良いのではないかとということです。

京都府立大学の宗田先生は「21世紀の日本人像」として「新しいものを欲しがらないほど成熟し、たくさんものを欲しがらないほどに豊になり、自分や愛する人のためだけでなく、みんなのために尽くしたいほど幸せになった。だから「暮らし」と「生業」を見直し「景観」を守る。「まち」を創る」とおっしゃいました。修験道にも通じるものがあると思います。(2013年9月17日開催)

10月：第4回「さあ、源流の里へ～吉野川水源地のむら『川上村』～」

【ゲスト】山本 尚さん（奈良県南部東部振興課長） 奈良の“むら”の魅力を紹介する連続さろん最終回は、11月に開催されるフローライフ・フォーラムの会場となる川上村の栗山忠昭村長を講師に招く予定でしたが、大型台風26号が接近していた影響で、村長に代わって、奈良県南部東部振興課・本尚課長に急遽駆けつけていただき、水源地のむらづくりについてお話いただきました。（以下、講演要約）

■吉野川上流、水源にもっとも近いむら「川上村」

川上村は、奈良県の南東部、吉野川の上流にあり、水源にもっとも近い村です。面積は約270km²。このうち97%が山林で、これは県全体の約7%にあたります。吉野林業の中心地になります。

人口は1,643人、高齢化率は50.7%で、全国でワースト6位。人口減少率が全国で6番目に高いということです。ワースト10のうち4つまでが奈良県南部の村でした。これだけの広さの中に保育所、小学校、中学校は一つずつ。それぞれ12人、27人、16人が通っていますが、2040年には、小学校、中学校にそれぞれ一人づつになる予測です。南部地域には4つの県立高校がありますが、川上村にはないので、多くは大淀高校、吉野高校に通っています。高校入学を機に家族ごと県中央部に移る場合もあります。集落は26ありますが、谷沿いに点在しているため行政効率をよくありません。

川上村の山には樹齢400年の木が何本もあります。400年の間、間伐を続けて良いものだけを残してきたため目が詰まっている。吉野杉は有名ですが、昔ながらのこの方法で育てているのは、川上村と東吉野村、黒滝村だけです。山を実際にご覧いただければわかると思いますが、紀伊山地は非常に急峻です。45度に近い山全部に植林されています。おじいちゃんが、孫の代には小遣いなるだろうと植えてくれた木も、今では切り出しようがなく、手入れもできない状態で、大きな課題になっています。

■逃れの里 ～神武天皇東征から天誅組みまで～

村には、神武天皇が東征の途中で戦を占った場所と言われる丹生（にう）川上神社があり、上社・中社・下社の3社があります。上社は大滝ダムの水没予定地になったため、平成10年に高台に移転しました。吉野は逃れの里といえますか、政争で逃れて来られた方が多くあります。古くは天武天皇。源義経も吉野の金峯山寺に身を隠しておられた。平維盛も野迫川に逃れたと伝えられています。それから後醍醐天皇、そして南北朝統一後に開かれた後南朝最後の自天王が吉野で亡くなられたことから、自天王を祀る「朝拝式」を毎年2月5日に

開催しています。これは 500 年続くお祭りです。近いところでは、天誅組も吉野に逃れてきております。

■「川上宣言」一下流にきれいな水を流す

通常、台風西はからきますが、昭和 34 年の伊勢湾台風は一旦伊勢湾に入り、東から奈良県を襲いました。川上村でも多くの被害がありましたが、下流の吉野町・大淀町で相当な被害があり、これを避けるために計画されたのが大滝ダムです。昭和 56 年に覚書が締結され、平成 15 年に一旦完成しますが、湛水試験後に貯めた水を抜いた際に地すべりが発生し、その対策に 10 年を費やして平成 25 年の春に完成しました。

ダム建設合意後、ダムに沈んだ村が集まり会議を開いた「湖底サミット」や、当時日本全国で 6 つあった川上村と結成した「川上サミット」などの取組を始めます。今では、市町村合併で川上村を名乗っているのは、長野県と奈良県だけになりましたが、平成 8 年には川上村が「川上宣言」を出しました。

「私たち川上は、下流にはいつもきれいな水を流します。自然と一体となった、都市にはない豊かな生活を築きます。都市や平野部の人たちにも、自然の価値にふれあってもらえるような仕組みづくりに励みます。子どもたちが感動できる場をつくります。地球環境に対する人類の働きかけの見本になるよう努めます。」

これを具体化していくために、最源流部の原生林 740ha を村が購入し、水源地の森として保全する他、下流の和歌山市との協定や吉野川流域市町村での流域協議会、全国源流の郷協議会設立など、流域での連携も進めています。

■日本一の美しい水源地の村をめざして

地すべりが起きた白屋地区は全戸村内移転しましたが、景観ガイドラインを策定し、その跡地の植栽を彩のあるものにする事で美しい風景をつくる取組を始めています。吉野の山のほとんどが杉・檜の植林ですが、林業で経済的にまかなえるところ以外では、景観を配慮し落葉樹で色とりどりにするという計画です。

栗山村長はその覚悟として、「源流域の誇りと責任を果たす。吉野川の恵みに感謝すれば流域の未来は明るい。」と断言されています。そしてその思いを次のことばで締めくくられました。「国が豊かであることは地方から。みどりの水がめとコンクリートの水がめを大事にし、水源地を誇れる暮らしに価値を求め、この地で生き抜きたい。」

(2013 年 10 月 15 日開催)

◆南部地域産業復興推進大会 in 水源地のむら
～紀伊半島大水害からの復興に向けて～
「スローライフ・フォーラム」開催報告書◆

.....

NPOスローライフ・ジャパン
〒160-0002 東京都新宿区坂町 21 リカビル 301
電話 03-5312-4141 FAX 03-5312-4554
E-Mail/ slowlifej@nifty.com
2014年1月30日